

# 2004年度 こころの相談室「ほっと・ルーム」活動報告

報告者 センター助手 角田 真紀子

本年度のほっと・ルームは、学校臨床総合教育研究センターの改組に伴い、今後の運営等が検討されることになった。本年度はその移行期間として、昨年度までの体制にて活動が行われた。ほっと・ルームは、カウンセラーが来校する月曜日と木曜日の週2日開室され、室長は亀口（大学院教授）が担当し、カウンセラーは角田と瀬戸が担当した。

今年度のほっと・ルームは、通常業務としてこれまで通りオープンルームと相談の2種類の活動を行なった。その他の活動として、授業「総合心理入門」と連携した。また学校保健安全委員会主催での「カンファレンス」に出席した。さらに、PTA「真綿の会」での講座に2回、PTA講座に1回招かれ講師を務めた。

## (1) オープンルーム

オープンルームの利用状況は表1に示した。昨年度よりも、来室者が大幅に増えている。なかでも、中学校段階での女子生徒の利用が増えた。特に2年生男女、3年生女子の利用が多かった。この理由のひとつとしては、中学校段階で学年レベルにおいて生徒が不安になったりいろいろしたりストレスを抱えたりする「できごと」が多くなったこと、必ず集団で利用していたこと、などが考えられる。多くの生徒が自分の定位置を作り座っていた。

表1 オープンルーム利用状況（下段は女子）

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	総計
中学生	22	13	28	35	30	17	35	3	17	28	8	236	940	
	18	49	74	46	88	46	90	60	95	46	5	617		
高校生	10	0	8	3	8	2	10	6	8	15	0	70		
	2	0	3	0	1	2	3	1	1	4	0	17		

オープンルームでの生徒の様子としては、昼食をとりながら仲間やスクールカウンセラーとおしゃべりをしたり、読書、落書き、オセロ、将棋などの遊びをしたり、ギターを弾いたり、歌ったり、ぼやいたり、少し相談をしていったり、ソファや床に座ってくつろいだり、箱庭で遊んだり激しくストレスを発散する生徒などがいた。

また、異学年交流が見られ、先輩後輩の間で情報交換をしていた。オープンルーム時には、部屋までは入ってこずに廊下で話したり弁当を食べる生徒もいた。

ほっと・ルームに来ている生徒が昨年度と同じ顔ぶれだとは限らないが、昨年度の来室状況と比較をしてみると、中学校段階の生徒の来室は、3年の男子以外、学年があがると増加している（表2）。おそらく、これは来室に慣れたこと、学年があがるごとに勉強や部活、仲間関係などでの潜在的・顕在的な悩みが増えることが考えられる。一方、昨年度の3年生は高校生に進級して4年になり、来室が減っている。これは、高校生段階の生徒は学年があがるごとに落ち着いていく、もしくは自分の気持ちを自分自身や仲間との間で処理するようになることができることによると推察される。

表2 学年別のオープンルーム利用状況  
(左列: 2003年度, 右列: 2004年度)

学年	男子	女子
小→1	—	53
1→2	56	70
2→3	130	60
3→4	74	25
4→5	93	8
5→6	45	14
6→卒	9	—
不明	4	0

## (2) 個別相談

個別相談は、年間を通して次のような利用があった（表3）。相談件数は1日あたり16件である。

昨年度の利用者数と比較してみると、中学生では、3年の男子以外、学年があがるごとに利用が増えている。高校生になると、およそ利用が減っているものの、6年生は男女ともに昨年度より利用が増えている（表4）。この理由としては、昨年度から卒業研究に関連したガイダンスを受けてきた生徒たちが、6年生の仕上げの段階になって利用を増やしたということがあげられる。また、

そのような流れができているので、今年の5年生女子についても卒業研究関係でもちこまれる相談が多くなった。

このほか相談内容は多岐にわたっている。主な相談内容は、学習不振、不登校、発達障害、対人関係のトラブル、非行、などについてである。個別相談では、面接のほかに、心理検査、他機関へのリファー、コンサルテーションも行っている。これらの具体的な内容については、プライバシーの関係上公表しない。

**表3 個別相談利用状況（下段は女子）**

	4	5	6	7・8	9	10	11	12	1	2	3	計	総計
中学生	0	2	1	2	2	1	2	1	1	2	0	236	1043
	3	9	16	10	4	3	8	7	0	5	0	617	
高校生	0	0	0	1	1	2	1	1	1	4	0	11	
	2	0	1	0	2	5	5	0	0	2	0	13	
保護者	0	0	1	3	5	3	1	2	2	2	0	19	
教員	1	3	12	11	4	7	6	5	1	5	0	55	85
その他	0	0	0	1	0	1	3	0	3	0	3	11	

**表4 学年別の個人相談利用状況  
(左列；2003年度、右列；2004年度)**

学年	男子		女子	
小→1	-	2	-	2
1→2	0	0	4	11
2→3	3	9	8	47
3→4	6	2	10	1
4→5	0	0	0	7
5→6	1	5	0	2
6→卒	0	-	3	-

### (3) その他の活動

#### 1. 授業「総合心理入門」との連携

授業「総合心理入門」では、生徒の自己理解、他者理解、自己とのコミュニケーション、他者とのコミュニケーションなどを目的として授業が進められている。テーマとしては、自己表現について、夢・キャリアについてなどがある。それぞれのテーマで自己理解を進めた生徒で、もう少し理解を深めたいという生徒や、キャリアについてあらためて迷っていることが分かったので何とかしたいという生徒は、ほっと・ルームにやってきてガイダンスを受けていた。また、授業のなかで個別サポートが必要と感じられた生徒に対しては、個別に相談がなされた。

#### 2. 学校保健安全委員会主催での「カンファレンス」

学校保健安全委員会が主催した生徒の精神的健康についてのカンファレンスに出席した。ほっと・ルームからは、来室している生徒の様子や傾向、気になる生徒について報告した。また分科会にわかつて行われたケース・カンファレンスに参加し、附属教員と一緒に当該生徒とのかかわり方、方針などについて検討した。

#### 3. PTA「真綿の会」での講座とPTA講座

それぞれの会において、スクールカウンセラーの立場から、生徒の様子や傾向、思春期の子どもに対して親としてどのように対応するか、子どもはストレスをどのように感じているかなどについて、ワークを用いながら話をした。「真綿の会」では、1回目は保護者のみに対して、2回目は生徒会執行部を中心とした生徒と保護者との合同で講座がもたらされた。生徒がワークに参加することで、保護者は子どもたちが普段どのような気持ちで何を考え行動し生活をしているのかを知ったり、普段自分の息子や娘に聞けない話が聞けたりしていた。親子関係では、なかなか面と向き合って話すことができないが、同年代の子どもとは率直に話ができたようである。

PTAの講座では、子どものストレスについての理解を深めるために、スクールカウンセラーとして、普段どのように生徒と関わっているか、ほっと・ルームに来ている生徒の様子や、思春期の子どもの特徴などを話した。

#### 4. 校舎内の空きスペースへのソファとテーブルの設置

ほっと・ルームは「問題のある人」が来るところだと考えている生徒もいる。一方、学校では教室以外で話をしたりゆったりする場所をほっと・ルーム以外で探すのは難しく、ほっと・ルームに行くほどではないけれど教室ではないところで話したいという生徒は、これまで行く場所があまりなかった。ほっと・ルームでは、部屋の境界をまたがりにほっとできる場所として、校舎の空きスペースにソファとテーブルを設置した。これは、附属側も欲していたことであったが、生徒たちはソファが設置されるやいなや利用していた。何となくたむろする場所、何となく和む場所、として機能しているようである。

#### (4) まとめにかえて

先にも述べたとおり今年度のほっと・ルームは移行期間のため、スタッフとしては十分な活動ができなかった。にもかかわらず、カウンセラーが2年目ということもあってか生徒や保護者、教員の利用が増えた。今後ほっと・ルームがどのように運営されていくか検討中であるが、これまでのように「生徒がちょっとほっとする場所」「相談したくなったらいつでも相談できる場所」として機能することを願う。